



孫余見所志

初編
拾四

2475
14



門 18
番 2475
14

鎌倉

其の...
鎌倉

不...
...

...

甲子

十二月

...

鎌倉見聞志巻之十四

目録

茶儀榮

- 一 實永自書并方村兄弟と練
と心算ふ事
- 一 権原重時浦殿と御事
- 一 浦原重時と平論の事

幸しく申す可なりと

何れぬ物に盡

てきてやぬきて

（き）にむや

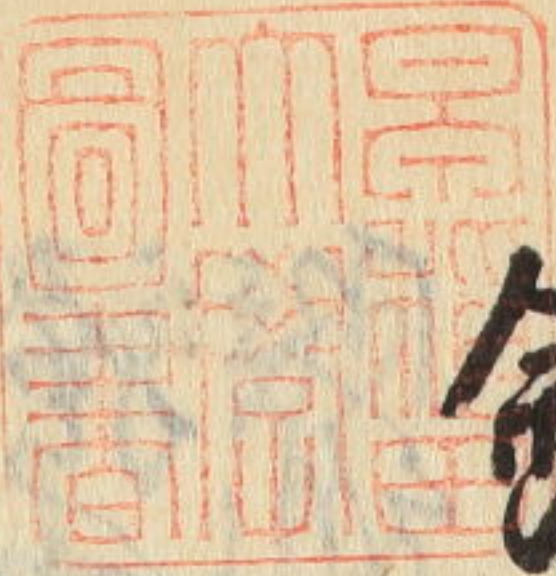
明治十二年

東京義三太五七〇五

赤坂表基丁月、廿五

（あ）

録今見聞志巻之拾四



實事自書并る村見事と
神と心ある也

之程に備せられたる諸勅の
念中まゝに諸勅におびその
ふも志すにさる中より凡そ
由縁叙し得る人ありし由縁
志のび入將軍を教しむる事

いづれ(西國)の由(西國)入(西國)の
て右の(西國)の由(西國)入(西國)の
池(西國)の由(西國)入(西國)の
し(西國)の由(西國)入(西國)の
ま(西國)の由(西國)入(西國)の
強(西國)の由(西國)入(西國)の
池(西國)の由(西國)入(西國)の
ん(西國)の由(西國)入(西國)の

池(西國)の由(西國)入(西國)の
し(西國)の由(西國)入(西國)の
ま(西國)の由(西國)入(西國)の
強(西國)の由(西國)入(西國)の
池(西國)の由(西國)入(西國)の
ん(西國)の由(西國)入(西國)の
池(西國)の由(西國)入(西國)の
し(西國)の由(西國)入(西國)の
ま(西國)の由(西國)入(西國)の
強(西國)の由(西國)入(西國)の
池(西國)の由(西國)入(西國)の
ん(西國)の由(西國)入(西國)の

新報のこころをうけしるるに
後にもあつたにせよ。世に
散りて入るる下知せらるる
とて所高徳の由縁を
り進の由縁をて取り来り
神を身が始終を流況と
えらむるもの氣中血を
改りてそのまゝなり

くからんがよしなりとて
（年ひらき）のよしなりとて
くはるるよしなりとて
も還りてよしなりとて
還りてのよしなりとて
又將軍還りてのよしなりとて
がしるるよしなりとて
おしめせらるるよしなりとて

の者なるもいばか母より生れしは病
ましくりらるるに悲しむらうて祐の
妻子はまはまはく復しむるは
如時宗程の身死すも其法
の家はありよし定まらるるは
是れと海は作せられよと
とまはしむるは慈母とて
言はれよとありらるるは
言はれよとありらるるは

出づ祐成時致す同言せしや
んとして弟はあはれは
のものともはるるは
此のものをはるるは
姓はあはれははるるは
日なりはあはれははるるは
夫の持死すもあはれは
いと母も自書せしとありらるるは

津の身許毎九節祐清とまゝ津
とてしとて子とて九神中とてそま
ゝ祐清の妻とて卯の子とてまの
一人まの妻とて卯の子とてまの
辨也まのとて祖父祐祝は神頼朝の
歌對終は生痛しき心の響の浦
の平流子流けらまゝの平流留の
まの(切)りて命とてまの(頼朝)

公田好まを母とて平流流のまの
らるるまのまのまのまのまのま
中作舟とてまの祐祝とてまの一回
歌對とてまの身の今又何面國あり
まのまのまのまのまのまのまの
害とて死とてまの君とてまのまの
まの思の絶とてまの平流とてまの
まのまのまのまのまのまのまの

るるが今華を十八日其はつてのま
海合者お軍のものこらして一回は
ついでにちやうど並行かたせり
てし使おむらひらりゆもこそ者
湯はなりあ田よあつらりるさ年辨
はの國やちり住居はあらる海島は
念わ通りやるしと述言は波さ
水と辨海より出る右は

すも人をして流しめしりしりる回
七月朔日湯合のまに及九節は長
の耳繩のまよおしりて廻さむら
とせしは流中なるしに返日ほしお
まよひつらあるしとのまにあらはれ
ろくは夜の女を長ががすは袖も居る
曉守もむり実をひそるは力と魂を
出さるなり西の方をむらひ清く

傳しるもらまら自書せしる女傳の
業はけり多きはけり傳せしるもの
もや自書せしるものもや
もや女抱しるものもや
自書せしるものもや
あるの兒父の仇を討つるもの
とけりかや傳乃所なる一所の
討死するものもや

傳しるものもや
今もなるものと傳合わたりしもの
もや海しるものもや
法郎なるものもや
人事なるものもや
害せしるものもや
一人の母ありしものもや
りけりいしものもや

善人父行なる九命しもの少國より討
死のり出ぬ母后を次とすども積久
く誦好し行り今も信を二人の
兄の討死し誦生る早死なるまじや
此の行何れ早く死せんまじや
そこのまじやの武蔵もこの血報志
志まじや又出ぬ母の血厚恩報
まじやのまじやの強念ありまじや

けりまじやの行ありまじやと完
神もやまじやの行ありまじや
しるまじやのまじやのまじや
終るまじやのまじやのまじや
まじやのまじやのまじやのまじや
まじやのまじやのまじやのまじや
まじやのまじやのまじやのまじや
まじやのまじやのまじやのまじや
まじやのまじやのまじやのまじや

むらうすまのよみかきしるあね右あを
ひしうすしりくねねかひつらり
面士のせなまじりかひねがくま
ひからちかきせしものねねあま
せもまはくか海さるものせ
しんが同きしるあまのまひし
尋句人為しりあるあもしり短急
法師のねもあまひまて六祐あ時致

かきしるあまのねあまのまひし
まもしりものねあまのまひし
あまのねあまのまひし
うあねしりあまのねあまのまひし
しりあまのまひし
入道くねあまのまひし
しりあまのまひし
しりあまのまひし
しりあまのまひし

あつたる古光の面をたてて
んせふまじし其の姫はよのくに
北条その卯の由縁今も
とよしよとていせしと
梓河内之部は九部未だ
祐成何致るにまはる双と
勇徳はて東のまはる
るのねり物中け実永法師の

より出づる武蔵の
るは流石祐親法師の孫河内
梓河内の自給とて
より祐成何致るにまはる
るのねり物中け実永法師の
語ゆるる南のまはる
業縁のまはる
以絶するは是

く宣ひつらさく物類の足事
勇まると感づるは日々祐祝法所
海ゆらぐ物類の流人の同いさ
く由女抱せし旧好を思ひつら
久也年二月作夏の間願成院
あまゝ祐祝入道の十二回心の偉事
物類の志ありし津十慈欲の没存を
ひびひらふま一古今に思ふ人將と

感祐しよむるも有るものなりそ
の後おれし七事作有九所祐祝が
梓をよむるは作有九所祐祝を
一河海の志をよむるも子孫お
續しよえらぬの海作有九所祐
作しよありの足利の氏は建
延元の字ありしと名を記し其子祐
於おれし初めしうの関東官

馬次是吾氏の附屬也
藩人会より子孫お續せり
猶や何致り買かり
らとれいしを辨り
買とまのりん
有社大明神
宙と我の社檀
毎半也月廿八日氏子

多終とわさ
の買と反と
多
や今けそ
今とま
とほ父母兄弟
はらちる
人及是より

海人あや有るちをばいといふにせし
將軍はあやぬりぬりせし
るかまのひらるるをいふ人のもも後
の歌あつしと伝はるるもあつるあ
るをいふと違はれり人の拍を頼るも
一歌をよゆらふにせし心川あま
志のまけはたあつる神頼るるま
あつるまをいふまをいふまをいふま

をさぶあまの歌多きあつるま

梶系京時浦のまを洗はるるま

お梶系京時浦のまを洗はるるま
あつるまをいふまをいふまをいふま
とあつるまをいふまをいふまをいふま
つるまをいふまをいふまをいふま
あつるまをいふまをいふまをいふま
あつるまをいふまをいふまをいふま

あつてつゝかゝるにわづらひてかゝるにわづらひて
ゆゑにわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて
かゝるにわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて
のわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて
ゆゑにわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて
自ぜんといふにわづらひてわづらひてわづらひて
軍の中人をわづらひてわづらひてわづらひて
後使眞実の人ありてわづらひてわづらひて

をわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて
同くわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて
そぞろにわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて
をわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて
種をわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて
とわづらひてわづらひてわづらひてわづらひて

あふや身なる多限も年一も行賜
痛き事おぬこのかひらるやと申
波傳いりく一様なるは後より
折らぬ浪を叩き入花頼もよ思入
とちのひらけりるか母といは後
得る是れを怪ひ將事申運
此の由縁諸の存糸討ひせり
此の由縁とすりるるにいもあはけ

連枝ゆていりる由縁余も存と同ふ
ゆき教はの由縁自今由縁徳は
く思しころ中も振お母りよ法
たよ對しるはれは由縁育ちる由
ゆ天よ二ツの目ぬ地は二人のま
とて神君既よ一夫の大君なる由
しるも諸國乃大小名を向て教ふ
不ぬりゆていりる連枝の由縁とす

ゆ花類あるうらうらなまはひひやいの
とまお日しゆ中威勢もす所合らるかに
るよりよまえしゆ中家人の群衆を専ひ
中身の威光をももめりんとすまうて
席よりしる馬とらしむる趙さるが所
るお似ありあすは一統れあま
り古来よりりあめしむき天下の格持
り君臣のい武おとあまらむあま

人かのたゆ如やうらうらなまはひひやいの
ゆ花類あるうらうらなまはひひやいの
るお似ありあすは一統れあま
り古来よりりあめしむき天下の格持
り君臣のい武おとあまらむあま

見よ〜好軍の捕あ〜元もな〜
時よ〜使〜
毎葉の〜
子用〜
中〜
今〜
ひ浦〜
振舞〜

法〜
ウ〜
の〜
海〜
〜
稀〜
〜

ぬ人の比人乃多子こそを席と
とも父の呼まひあるは服のま
る由(常)ききと種は乃所為と
洗せむぬ想と物のそ
うそ思のそ別あり提
所一海とをよと
よくいへる浦又篤実の
あよる西暦よ好いもの

か
大友の
ふ
い
と
あ
の
と
寛

Handwritten header text at the top of the right page.

とくしよとむ(ふら)のや

浦及権原京言しと平海のま
物と権原京言しと平海のま
般と送板よ今言しと平海のま
浦及権原京言しと平海のま
物と権原京言しと平海のま
般と送板よ今言しと平海のま
浦及権原京言しと平海のま
物と権原京言しと平海のま
般と送板よ今言しと平海のま
浦及権原京言しと平海のま

Handwritten header text at the top of the left page.

た振のこまかむまものから次
経と事智し者ぬりと法不簡
ましと事智し者ぬりと法不簡
ぬりと事智し者ぬりと法不簡
いぬりと事智し者ぬりと法不簡
びぬりと事智し者ぬりと法不簡
まぬりと事智し者ぬりと法不簡
いぬりと事智し者ぬりと法不簡
びぬりと事智し者ぬりと法不簡
まぬりと事智し者ぬりと法不簡
いぬりと事智し者ぬりと法不簡
びぬりと事智し者ぬりと法不簡

りらるがは次乃同かあひらちも後
りる事く父事附が命よりなり
とがねとちのあひら浦殿のまあり
うふよんく母とて懐びあはれ
給ふ事とがらなり夜中のまあり
たの浦殿のあひら浦殿のまあり
あひら母とてあひら浦殿のまあり
やあひら浦殿のまあり

打笑ひてあひら浦殿のまあり
止らば夜中のあひら浦殿のまあり
とてあひら浦殿のまあり
限り浦殿のまあり
者命よりあひら浦殿のまあり
久事高きあひら浦殿のまあり
あひら浦殿のまあり
今も浦殿のまあり

中^{ちゆう}の^の返^{かへ}ひ^ひ法^{ほふ}同^{どう}捕^との^の事^{こと}は^は法^{ほふ}
没^{ぼつ}大^{たい}切^{せつ}を^をそ^そへ^へ一^{いつ}巻^{まき}紙^しの^のし^しら^らぬ^ぬ
り^りや^やぬ^ぬり^りを^をそ^そへ^へま^まで^でう^うち^ちら^らぬ^ぬま^まは^は
余^よ人^{にん}を^をる^るの^の後^ごに^にし^しら^らぬ^ぬま^まは^は
由^{よし}連^{れん}枝^しの^のま^まも^もあ^あら^らぬ^ぬま^まは^は
母^{はは}と^とお^おの^のお^おん^んを^をそ^そへ^へま^まは^は
い^いは^はし^しも^も諸^{しよ}君^{くん}と^とお^おの^のお^おん^んを^をそ^そへ^へま^まは^は
将^{せう}自^じ由^{ゆう}の^の法^{ほふ}は^はい^いま^ま一^{いつ}巻^{まき}紙^しの^のし^しら^らぬ^ぬ

思^{おも}ひ^ひな^なれ^れば^ばい^いま^ま一^{いつ}巻^{まき}紙^しの^のし^しら^らぬ^ぬ
と^とら^らぬ^ぬま^まは^はい^いま^ま一^{いつ}巻^{まき}紙^しの^のし^しら^らぬ^ぬ
何^{なに}も^もな^なし^しの^のま^まも^もあ^あら^らぬ^ぬま^まは^は
子^こを^をそ^そへ^へま^まは^はい^いま^ま一^{いつ}巻^{まき}紙^しの^のし^しら^らぬ^ぬ
今^{いま}宵^よの^の事^{こと}は^はい^いま^ま一^{いつ}巻^{まき}紙^しの^のし^しら^らぬ^ぬ
が^がお^おの^のお^おん^んを^をそ^そへ^へま^まは^はい^いま^ま一^{いつ}巻^{まき}紙^しの^のし^しら^らぬ^ぬ
か^かよ^よな^なし^しの^のま^まも^もあ^あら^らぬ^ぬま^まは^は
と^とら^らぬ^ぬま^まは^はい^いま^ま一^{いつ}巻^{まき}紙^しの^のし^しら^らぬ^ぬ

甲く浦敷は今頃さういふはしりも
床階もさういふ押さへり
西理もさういふあつらふあつらふ
のうへもさういふあつらふ
を新乃推し申さういふ新のは合
やから浦敷もさういふあつらふ
との子細あるさういふあつらふ
個の波もさういふあつらふ

可くさういふあつらふ
せしもの次は徳のり跡とるあつらふ
理もさういふあつらふ
しり事ぬりし押さへられり
をさういふあつらふ
権もさういふあつらふ
うい居りあつらふ
頼神もさういふあつらふ

とう 殿中よも 悔り 次なるを 憂ふ
より 半も ぬれぬ こと 申さる 所 陰
ありし こと かつ 一 海 河 ぐ しく せん
と 云々 返 目 け 依 怙 の ま 理 の ぬ
絶 然 然 頼 押 ぬ へ へ へ へ へ へ へ へ
あ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
仰 せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ
る 年 海 とも あり ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

乳 明 なる 入 ませ なる 浦 せ 先 浪 なる なる
一 一 の 事 一 ね っ っ っ っ っ っ っ っ
と 云々 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
と 云々 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
授 授 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ら ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
は っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
将 将 将 将 将 将 将 将 将 将 将 将
今 今 今 今 今 今 今 今 今 今 今 今

されしうらむは罪なかりけり
 まひかりに事なきがらひ
 やむら物事なればかのまじ
 ましは後をいふる由に
 此の海変定一花類を
 一系付がやせしゆは
 必要ありと思はれぬ
 所はと候とさすべし

六、三、一

一

く

人

一

目

鎌倉見聞書巻第十四終

